第三講　早稲田大学　過去問演習③　30分

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

記憶力がよいとか悪いとかよくいわれるが、その記憶力に二種類の区別があることを知っているだろうか。一つは、村の古老が昔の出来事をよくおぼえているという、あの記憶力である。しかしこれは別に昔のこと、つまり長期的な記憶でなくてもよい。ごく最近の些細なことでもかまわない。要するに、物事の流れや筋道をおのずと記憶しているという、あの能力である。もう一つは、何かを積極的に記憶する能力、つまり簡単にいえば勉強のときに使う記憶力、いわゆる暗記暗誦の力である。この二つの記憶力は意志の有無に差があるだけで、おぼえていて思い出すというその本質において同じだといわれるかもしれない。しかし、どうだろうか。実際に即して考えてみよう。

たとえば学校で宿題が出て、次の授業までにある文章なり数式をおぼえていかなければならないとする。自分の部屋で一所懸命に勉強していると、隣近所から何かの物音か音楽が漏れ伝わってくる。あるいは遅くまで勉強

している自分を心配して、母が夜食を用意してもってきてくれる。そうした物音や音楽のこと、部屋に入ってきて言葉をかけてくれた母のことを自然におぼえている能力と、いま必死に脳に刻みつけようとしている文章や数式をあとで思い出す能力とは、本来的に性質を異にしているのではなかろうか。前者は物事のなりゆきを［ 1 ］に記憶し、保持し、それをその時間的経緯にそって思い出す力である。それに対して後者は、物事を一まとまりの運動として扱い、それを［ 2 ］に繰り返して緊密に結合させ、あとでそっくり機械的に反復する力である。

　この両者のちがいは、それらが欠落した場合を想定するとさらに際立つ。仮に前者を欠いて、後者の記憶力だけがあるとしよう。すると人間はつねに目先のことだけを考えているのではなかろうか。さきほどの例でいえば、［ 3 ］。すなわち目の前にあるもののなかから、自分に役立つものだけを拾い集めているのである。自分を効率的なロボットに仕立て上げているといっても過言ではない。ロボットには悪いが、そこには流れ去った時、あるいは役に立たず見過ごされたものに対する[4]<u>愛惜</u>の情は存在しない。

　これとは反対の場合はどうだろうか。前者の記憶力だけがあって、後者が欠けている場合である。これはこれでまた、事態は明瞭であろ

う。　5　。出来事を受身で迎えるだけであって、努力し前進することができないのである。目の前のものはすべて、後で懐かしく思い出されるためだけに存在する。[6]そこでは何ものもパターン化されず、したがって何かのために利用されることがない。そのとき人間はその場の情緒に浸りきるだろう。それはまるで夢のなかの情景に圧倒され続けるようなものではなかろうか。

このように思考実験をしてみると、二つの記憶力のちがいは否定しがたいように思われる。しかしそれと同時に、この想定が非現実的であり、二つの記憶力の協働こそが本当の姿であることがわかってくる。大げさにいえば人間の人間たるゆえんは、この二つの記憶力の協働作業の賜物である。実際、二つの記憶力は別個に切り離されたものではなく、相互に関連している。たとえばの話であるが、村の古老は若いころから何度も繰り返して同じような出来事に接し、同じような対応をしつつも、生活のなかで改善改良の努力を惜しまず、つねに周囲に注意深い視線を投げかけていたからこそ、長い年月が経過しても昔のことをよくおぼえているのだろう。そのことを理解するために、身近な例に戻ってもう一度考えてみよう。

子どものときに、百人一首を学校用に暗記暗誦したばかりでなく、家で実際に歌ガルタをして遊んだ人がいるだろう。大人になって振り返れば、

その記憶は繰り返しの利かない人生を形づくる掛けがえのない一コマである。それは些細な一コマにすぎないが、その記憶を手がかりに、忘れられていたさまざまな出来事が一挙に懐かしく蘇るかもしれない。人生に意味があるのは、こうした思い出がいっぱい詰まっているからではなかろうか。そしてこれは、第一の記憶力の働きのおかげである。

　しかしそれとはまた別に、百人一首の歌を先生や親にいわれて繰り返し暗記暗誦しなければ、カルタ遊びがそもそもできない。その場に流れる喜怒［ 7 ］の時間ばかりを気にしていて、おぼえるべき対象としての物事を反復し、整理し、定着しなければ、百人一首は記憶できず、国語の成績は急降下である。夢のなかで詠嘆しているようではだめなのだ。ただし、ここが肝心なところだが、第二の記憶力ばかりを合理的に働かせていると、子どもは可愛げのない優等生になるだけで、百人一首を歌というより記号の羅列として記憶し反復する機械と変わりがない。二つの記憶力が協働して絡み合い、あえて理想的にいうならば、学習の過程や暗記暗誦の各場面での友だちや先生や親の表情と仕草、学びの内容だけではなくその場の情景を含めた経験が刺激となり、自分から求めて読んだ参考書の語り口や文体までもが影響し、百人一首をめぐる文化の伝統が心身に流れこみ、その結果としてカルタが遊ばれなければ、学習する動物であり遊ぶ

ヒトでもある人間の生きがいは無きにひとしい。

　さて、村の古老などと先にいったが、これは昔話の次元にとどまらない。ここまで述べてきた二つの記憶力は、いわゆるアナログとデジタルに対応しているのではあるまいか。その点について最後に考えてみよう。一般にアナログとは、ある量またはデータを連続的に変化しうる物理量で表わすことである。もっと簡単にいえば、あるものをそれとは別のものによって類比的に、両者の似たところを通じて表現することだ。これは一秒二秒、一分二分という時の経過を、断続的な数字の羅列ではなく、時の流れのように連続的に動く針によって表わすアナログ時計のことを考えればすぐわかる。ところで第一の記憶力もまた、行動を目指して刻々と進展する知覚世界のありさまを、静かな観照に沈潜する記憶世界において、時の流れに沿ってアナロジックに再現しているのではなかろうか。

　第二の記憶力とデジタルとの対応は、デジタル技術におけるデータの集約圧縮と同じことが、暗記暗誦の反復過程を通じて行われていることからいえるだろう。どちらの場合でも不必要で余計なものはノイズとして排除される。そもそもデジタルとは、ある量またはデータを有限桁の数値（たとえば二進数）として表わすことである。いいかえれば、あるものをそれとは異なる別のものによって非アナロジックに表現することだ。データの

集約と圧縮はそのことにより可能となる。似ているところに囚われてしまっては身動きがとれないのである。デジタル時計は連続的な時の流れを断続的な数字の点滅によって一気に示す。アナロジックであるということは気が休まるかもしれないが、[8]的であるということからは遠いのだ。

　しかし、こうした対応関係が認められるならば当然、デジタルとアナログは対立し排除し合うものではなく、二つの記憶力と同じように協働するべきものだという結論にならないだろうか。アナログが[9]でデジタルが[10]だというのは単純すぎる二項対立である。アナログ思考が異なるものの間に類似点を見つけて世界をひろげ、新たなきずなを結ぶために大切であるとすれば、デジタル思考もまた、単に効率的というだけではなく、そもそも生命の原初的な働きに根差しているともいえる。集約と圧縮というその基本的な働きは、第二の記憶力と共通するものであった。ところで第二の記憶力は、個人の意識的な努力の局面だけではなく、そもそも「人類の目」ともいうべき地平で働いている。たとえば、一秒間に四百兆の継起的振動を生じている光線は、人間によって赤色として一瞬に知覚される。仮にその振動を刻々と意識的に知覚するならば、何万年もの時間が必要となるだろう。しかもそのとき人間の周囲に広がるの

は、鮮やかな色彩に満ちた有機的な世界ではなく、灰色の無機的な平面ではないだろうか。ちなみに、私たちにとって燃えるように赤く見えるケシの花は、ミツバチには一種の白色としてあらわれているという。こう考えたときデジタルとアナログは、単なる情報処理方式のちがいを超えて、人間のいのちの両輪とさえいえるのではなかろうか。

問一　空欄 1 ・ 2 に入る最も適当な語句の組み合わせを、次のイ〜ニの中から選び、答えよ。

イ　1　感情的　2　理性的
ロ　1　合理的　2　恣意的
ハ　1　自動的　2　意識的
ニ　1　消極的　2　積極的

問二　空欄 3 に入る最も適当な文を、次のイ〜ニの中から選び、答えよ。

イ　心をひとつに集中させるのである
ロ　明日の授業にひたすら備えるのである
ハ　母親のように家族のことを気づかうのである
ニ　村の古老のように昔のことを忘れないのである

問三　傍線部4の漢字の読みをひらがなで記せ。

問四　空欄 5 に入る最も適当な文を、次のイ〜ニの中から選び、答えよ。

イ　人間は現在を反復するただのロボットになっている
ロ　人間は過去と現在の区別を失って途方に暮れている
ハ　人間はもう物事を自然に思い出すことができない
ニ　人間はもはや繰り返して学習することができない

問五　傍線部6「そこでは何ものもパターン化されず、したがって何かのために利用されることがない」の意味として最も適当なものを、次のイ～ニの中から選び、答えよ。

イ　すべてのものが独自で固有な存在としてあり、したがって他のものの手段となることがない。
ロ　すべてのものがてんでばらばらに存在し、したがって取捨選択することができない。
ハ　あらゆるものが声高に自己主張して統制が取れず、したがって優劣を決められない。
ニ　あらゆるものが新鮮さをいつまでも保ち、したがって再生利用されることがない。

問六　空欄 7 に入り「喜怒」とともに四字熟語をつくる漢字二字を記せ。

問七　空欄 8 に入る最も適当な漢字二字の語句を、それに続く段落（「しかし、こうした対応関係が」以下の段落）の中より見いだし、記せ。

問八　空欄 9 ・ 10 に入る最も適当な語句の組み合わせを、次のイ～ホの中から選び、答えよ。

イ　9　低級　10　高級
ロ　9　現実　10　理想
ハ　9　機械　10　電子
ニ　9　感性　10　理性
ホ　9　自然　10　人工

問九　次のイ～ホの中で本文の趣旨に合致しないものを二つ選び、答えよ。

イ　実生活を効率的に生きて未来を目指すことと、過去の遺産を大切にして情緒ある生活を送ることは、なかなか両立しがたいものである。

ロ　その場の雰囲気ばかりを大切にして人生を過ごしていると、前進して未来を切り開いていく意欲に欠けることにもなりかねない。

ハ　データの集約と圧縮はなにも特殊な技術ではなく、生きる上で人間がつねに無意識のうちに行なっていることである。

ニ　アナログとデジタルは相異なる技術からなる以上、目的を考えて別々に利用することが賢いやり方である。

ホ　自分の役に立つことだけをいつも考えていると、潤いのある人間的な時間を見失うことになりかねない。

（次ページより解答欄）

問一

問二

問三

問四

問五

問六　喜怒

問七

問八

問九

第三講　早稲田大学　過去問演習③　解答

問一　ハ

問二　ロ

問三　あいせき

問四　ニ

問五　イ

問六　喜怒　哀　楽

問七　効率

問八　ニ

問九　イ・ニ